

第85回麻布獣医学会 一般演題6

低分割放射線治療と外科的減容積を併用した 犬の鼻腔腫瘍7例

鴨林 慶¹, 圓尾 拓也¹, 五十嵐宏之¹, 斑目 広郎^{1,2}, 信田 卓男^{1,2}

¹麻布大学附属動物病院, ²麻布大学獣医学部

【はじめに】

犬の鼻腔悪性腫瘍は局所浸潤が強く、鼻出血や顔面変形などを伴い著しいQOLの低下を招く。その一方で遠隔転移率は低く、局所制御により生存期間の延長が期待できる。犬の鼻腔悪性腫瘍の治療としては外科手術と放射線治療があげられるが、外科手術のみでは生存期間の延長は認められず、その治療効果の高さから放射線治療が第一選択となっている。今回我々は、犬の鼻腔悪性腫瘍7例に対し低分割放射線治療と外科的減容積を併用し、良好な経過が得られているためその概要を報告する。

【材料と方法】

2005年12月～2010年1月までに麻布大学附属動物病院に来院し、病理組織学検査により鼻腔悪性腫瘍と診断された犬7例に対し、低分割放射線治療と外科的減容積を実施した。治療は、放射線治療として高エネルギーX線1回線量6～9Gy、計4～6回の低分割照射を実施した。減容積手術は3例で放射線照射実施前に、2例で照射期間中に、3例で照射期間終了後に実施した。有効性の確認のため、これまで本学で放射線治療を実施した63例と比較した。

【結果】

放射線治療と外科的減容積の併用を行った7例のうち、2010年6月現在、6例が生存中で放射線治療

後4～53ヶ月経過している。7例中1例のみで、放射線治療後12ヶ月での死亡が確認されている。一方、放射線治療63例の中央生存期間は209日であり、減容積を併用した本7例では有意な生存期間の延長が認められた ($P = 0.0002$)。放射線障害として、1例で皮膚壊死および骨壊死が認められた。外科手術における合併症としては、出血、皮下気腫が認められたが早期に改善が認められた。

【考察】

2002年 Mellanby RJらによる、犬の鼻腔悪性腫瘍に対し低分割放射線治療が単独で実施された報告では、放射線治療終了後の中央生存期間は7ヶ月とされている。また2005年 Adams WMらの報告によると、多分割放射線治療後に外科的減容積を行うことで放射線治療単独よりも生存期間の延長が得られるとされている。

今回、鼻腔悪性腫瘍と診断された犬7例に対し、低分割放射線治療と外科的減容積を併用した7例においても、放射線治療単独と比較し良好な治療成績が得られている。このことから、犬の鼻腔悪性腫瘍に対し低分割放射線治療と外科的減容積を行うことにより、長期の局所制御、については生存期間の延長が得られる可能性が示唆された。